

松根東洋城

先生と病氣と俳句

先生と病氣と俳句

先生の度々の大病のその都度、自分はどういふものかよくその病床に出会している。先生の病気は東京でばかりおこらなくて東京以外の旅行先でも屡おこった。勿論東京での一時にその病床にかけつけるのは当然であるが、そうした旅先での病気に偶然遭遇した事を不思議に思う位である。そして同時に、其の先生の病時に逢着する度毎、何かしら俳句が関係して来ることを閑却することが出来ない。その折々のことを考えて見ると、いろいろな記憶が甦ってくる。

中でも一番著しいのは例の修善寺の大患の時である。

あの修善寺の旅行は旅行そのものが自分が修善寺に行っているということに依て企てられたもので、勿論病後の保養が主たる目的であつたけれど又一しよに俳句でも作り乍ら悠々自適しようという意味もあつたのである。処が事實はああした大事になつてしまつたので、それどころじゃなかつたけれど、それでも病中病後をかけて先生は中々句を作られた。其日々々の役目が済んで毎夜別館から先生の寝て居られる本館の方へ訪問をすると、終日独りで淋しく寝ていられた先生は、疲れ切つた顔付にそ

れは嬉しそうなしかし淋しい笑顔を仄めかして自分を迎えて下すった。そうして夜更に又別館の方へ帰って行くまで、逢わなかった昼間の色々な話が二人で交される中に、先生は出来たよと一句二句見せられたりした。その内先生の病気が可也重く進んで数次の嘔吐に黄いろい液（実は血）が出るようになってからの事であつたが、示された句を無理に願って書いて貰った。それはもう仰臥のまま、苦しいのをこらえて巻紙に書かれたのであつた。それは

不圖揺れる蚊帳のつりてや今朝の秋

宮様の御立のあとや温泉の秋

外一二句のそれであつた。そしてそれは間もなく最後の
大発作の為仮死の状態に陥られた時には自然一時先生の
絶筆になつたものである。これは大震災に家財一切を焼
失した時、極僅かの筆蹟類と共に持出し、今も大切に保
存してある稀代の記念である。やはりその大病の時の句
に

別るゝや夢一筋の天の川

というのがあつたが、この句については先生が『思い出す
ことなど』に書添えていられる通り、凡そそんな心持が、

愈引つづき重態の先生とその先生を公務の都合で残して
帰京せねばならぬ自分との間に、俳句というものを介在
して、相通うたのであるように思われる。

それから大阪で先生が又病まれて湯川胃腸病院に寝込
まれた時は、丁度自分が郷里に帰省していて何も知らず
に京都まで帰って来、驚いて駆けつけたというまことに
偶然の出合いであつた。其の時はほんの僅かの時間では
あつたが、発病前の講演旅行談などがあつて、その旅中
吟なども話頭に上つた。此旅行中自分は扇をどこかで落
していたが、先生のところ丁度有合せの一本があつた

ので、それに近詠

涼しさや蚊帳の中より和歌の浦

という句をかいて貰った。先生はその時頗る元気が無く、たべ物もようよう粥をすすられる程度であつたので無理に書いて貰った様な訳であつた。後に先生の俳句研究をやつた時、あの病中でそんな事はある得ないと小宮君が否定してきかない程の状況であつたが、よく先生も書いて下さつたものだと思う。この時でも修善寺の時でも願う自分が随分乱暴だと我乍ら思いはするものの止むに止まれぬものがあつたからの事であつた。この時は帰京を

急いだったので僅か一二時間で袂を分つたが、若し丸一日でも滞在したことなら、その病魂を騒がして又先生に句作をそそのかした事と思う。

又これは旅中ではなかったが東京で神田の病院に入院して痔の手術をされた時も、退屈だったと見えて「まだいそがしきや一度此二階へ話しに来ぬか」と手紙で言つて越されたが、この時も先生は大に自分に作句をそそのかさうと言う下心であつたらしい。その折の手紙の端には、或時は

かりそめの病なれども朝寒み

とあり、又或時は、

痔を切りに行きし時

秋風や屠られに行く牛の尻

などとあった。しかし此時は、大変忙しかったのでとうとう一度も病院へ訪問することが出来なく、退院後うちの方へ行つた。

それからこんな手紙の来たこともあった。「……………病氣は略よろしい、然しまだ床は上げず……………寝ながら句を作らうと思ふが一向出來ず

酒少徳利の底に夜寒かな

酒少し参りて寢たる夜寒かな

眠らざる夜半の灯や秋の雨

一向句にならず……」というのである。かく俳句及俳句の事だと僕のところに向けられるのであった。

とにかくこういう風に病中だとか病後だとかには必然又は偶然に自分は先生の病床を訪うて何か俳諧の空氣に所縁した。これというのもこんな時には先生はまとまった仕事なども出来ないものだから俳句の心が頻に動いたものと見える。もつとも病氣の時ばかりでなく、小説を書上げてしまった後の疲労恢復の時などにもよくこういう

う事があり、総じて晩年の先生の俳句に就ては、自分は多く作句挑発の役目を務めたわけになっていた。その頃は自分も「国民俳壇」などやっていた関係から先生の句を俳壇に出したい為に自然そうする事も随分あった。しかし実は先生と二人ぎりで作っている気分がよいのであった。そしてそんな時、偶には先生もうるさそうに又めんどくさそうに言われることがないでもなかつたが、結局僕の注文に応じて必ず作られた。それも俳句に對する先生の趣味の根深さからの事でもあった。新年だからというては新年の句を、天長節だというては菊の句

をと注文するのであった。それにはこんな手紙もある。

「奉悼や奉送の句はどうも出来ないね天子様の悼言の句
なんか作つた事がないから仕方がない

御かくれになつたあとから鶏頭かな

（奉送） 嚴かに松明振り行くや星月夜

まづ此位にて御免可被下候」

其他十句集をやつたり、草庵の句会に引っぱり出した
りして退引させず先生に句を作らせたものだ。

「先生——病氣——俳句」という此文の見出しに、下へ
も一つ「——私」とつけ加えて此稿を結ぼう。

日本文学電子図書館

先生と病氣と俳句

著 者：松根東洋城

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館